

南宋における四書疏釈書の登場とその要因

——師説の継承と出版文化——

田 中 秀 樹

【要約】 本論は朱子『四書章句集注』の解説書、いわゆる四書疏釈書が南宋で登場したその要因を考察した。宋代の経書注釈書の特徴は「議論」形式であるのに対し、『四書集注』は簡略を示とする「訓詁」を重んじた。そのため該書は読者には理解が難しく、朱子は口頭での解説を積極的に行い、その結果多くの語録が残された。四書疏釈書はそのような語録を引用した書物であるため、朱子の意に反し「議論」形式に逆戻りしたものである。一方、経書を言葉で論理的に説明する方法を批判した陸象山も、自説拡大のために時に多言を費やし、門人達も語録を編纂するなど師の言葉を多く残そうと務めた。しかし陸学派は朱子学との対抗上、「文字言語」を用いない学問として自己規定することで、自派の純化を図ったが、その勢力は朱子学に及ばなくなっていた。つまり、知識人の底辺が拡大した南宋社会にあつて、大量に生み出された初学者たちは、言葉による丁寧な解説がなければ理解できず、四書疏釈書はそのような人々の需要に応じて登場したのである。

史料 一〇一卷一 二〇一八年一月

はじめに

南宋寧宗朝の慶元六年（一二〇〇）、いわゆる慶元の党禁という道学を標的とした政治的弾圧の中、朱子は没する。しかし、その翌年には党禁は緩和に向かい、開禧三年（一二〇七）、いわゆる開禧用兵の失敗により韓侂胄が謀殺され、反道学の政治の流れが終わると、逆に朱子ら道学派に対する名誉回復が進展し、淳祐元年（一二四二）には周敦頤、張載、程顥、

程頤の北宋四子とともに朱子が孔子廟に従祀されるに至る。このように、一二四〇年代には朱子学の政治的権威化が完成する。朱子学が政治的に公認されていった時期は、学術的にも論敵を抑え思想界における一尊化が進んだ時期でもあった。何俊氏によれば、ライバルの陸象山学派が勢力を失い、朱子学の優勢が明確になるのは、朱陸両派の弟子第三世代からであるという^①。朱子学派の弟子第二世代にあたる真徳秀と魏了翁の卒年がそれぞれ一二三五年と一二三七年であり、陸学派の弟子第二世代である錢時（卒年は不明）が活躍した時期も一二三〇年代で、同じく第二世代の陳埴の卒年が一二四一年であることから、朱陸の勢力争いも朱子学の政治的権威化とともに朱子学の勝利で終わる。また、ヒルデ・デ・ヴィールドト氏が科挙勉強に際して、「論」「策」の議論で朱子の説が支配的となる時期として指摘したのも、一二四〇年代のことであった^②。

朱子には非常に多くの著作があり、加えて死後も門人による『朱子語類』の編纂など、朱子学に関する書物はその権威化に伴ってますます増えていった。朱子の著作の中で最も重要であるのが、『四書章句集注』（以下、『四書集注』と略す）であることはいうまでもない。それは『大学章句』『論語集注』『孟子集注』『中庸章句』からなり、朱子思想の根幹を成す「四書」理解にとつて最も基本となる著作である。この書を読むことで「四書」を理解し、そして実生活の中で実践していく。これが朱子学者としての第一歩である。『四書集注』の普及は政治的権威化よりも早く、寧宗朝（一二九四—一二二四）から理宗朝（一二二四—一二六四）に移行するまでには、「家ごとに伝え人ごとに誦む」（『真文忠公文集』巻二九「論語詳説後序」といわれるほど読まれていたようである。

そして、『四書集注』を正しく読むための解説書として登場したのが、四書疏釈書である。例えば、早くは南宋に真徳秀『四書集編』、趙順孫『四書纂疏』、祝洙『四書集注附録』が著され、元代には胡炳文『四書通』、陳櫟『四書發明』、倪士毅『四書輯釈』、呉真子『四書集成』が登場し、この延長線上に明代永楽年間に科挙の標準解釈として国家の保証を得た『四書大全』『五経大全』『性理大全』が編纂されるに至る。その後も、明清時代を通じて、また広く東アジア全体で朱

子学の伝播とともに四書疏釈書は次々に著され、読まれていく。このように『四書集注』は基本的に疏釈書を通して読まれてきたのである。^③

本論の目的は、このような四書疏釈書が南宋において登場した要因を考察することにある。^④かつて佐野公治氏が疏釈書の登場から三大全に至る過程を「朱子学の形骸化現象」といったように、^⑤しだいに煩瑣膨大になっていく四書疏釈書はあまり高く評価されることはなかった。そこで本論では朱子以前に遡り、まずは宋代注釈史の文脈で考察してみようとするものである。本論では、朱子の高弟黄榦の『論語通釈』を、真德秀『四書集編』や趙順孫『四書纂疏』といった疏釈書の先駆的存在と見なすのであるが、黄榦の卒年は嘉定一四年（一二二二）であり、朱子学が制度的に権威化されるより前のことである。つまり、四書疏釈書が生まれるその萌芽は、政治的な朱子学の権威化、制度的な『四書集注』の聖典化以前にあり、少なくとも元代の科挙試験において朱子学的知識が必須となるずっと前のことである。なぜ膨大な注釈を付ける四書疏釈書が生まれたのか、朱子学の制度的権威化や科挙のためといった外的要因ではなく、その内的要因を探り、宋代学術史の中に四書疏釈書を位置づけたいと思う。

- ① 何俊『南宋儒学建構』（上海人民出版社、二〇〇四）、頁二九三。
- ② ヒルデ・デ・ヴィールドト、高津孝訳『南宋科挙の学術史』（中国学のパースペクティブ）勉誠出版、二〇一〇、頁一七五。
- ③ 辻本雅史「日本近世における『四書学』の展開と変容」（『季刊日本思想史』第七〇号、二〇〇七）。辻本氏は朱子学以後の東アジア儒学史を、『四書集注』は如何に読まれたのかという「四書学」の展開として辿ることで、従来別々に語られてきた中国、朝鮮、日本の儒学思想史を革新し、「東アジア共通の位相のもとに比較的に取り出すことを可能とする」（頁一五）と論じる。
- ④ 朱鴻林氏によれば、南宋での関心は残された朱子の言葉の收拾や初學者用のダイジェスト版を作ることにあったが、元代になれば朱子学が科挙試験に組み込まれたことから、必然的に科挙に関連する著作に関心が集まり、四書疏釈書が元代に多く著されることになったという。朱鴻林「丘濬『朱子学的』与宋元明初朱子学的相關問題」（『中国近世儒学実質的思弁与習学』北京大学出版社、二〇〇五）。また、元代の疏釈書に関する先行研究として、廖雲仙『元代論語学考述』（新文豐出版公司、二〇〇五）、周春健『元代四書学研究』（華東師範大学出版社、二〇〇八）がある。
- ⑤ 佐野公治『四書学史の研究』（創文社、一九八八、頁一〇二）。

第一章 宋代の經書解釈の特徴——「議論の学」としての「論文」「書信」「口義」「語録」

宋代の經学は『五經正義』に結実する漢唐訓詁の学を批判することにはじまり、自由な気風のもとと独特な解釈が多く著された。義理の学に基づく經解は、慶曆年間（一〇四一—四八）に活躍した劉敞『七經小伝』や「宋初の三先生」（胡瑗、孫復、石介）にはじまるといわれる。宋代義理の学とは、經文の一字一句の解釈（訓詁）よりも經書全体の意味（義理）、つまり經書に込められた聖賢の心を体得することを重視し、朱子学に結実する道学（理学）のみならず、王安石の新学（王学）、三蘇の蜀学など宋代における諸学の総称である。また訓詁を重視する学を「漢学」、義理を重視する学を「宋学」ともいう。そして、經学上の変化は、内容だけでなく、注釈書の文体にも見られた。元代の郝経は次のようにいう。

經書を学ぶ者で、訓詁に溺れず、穿鑿に流されず、議論に惑わされず、高遠に拘泥せず聖人の常道を知るなら、善き学者である。訓詁の学は漢に始まり、唐に完備し、議論の学は唐に始まり、宋に完備した。しかし少々の欠点がないわけではなく、訓詁は時に穿鑿に至り、議論は時に高遠に至った。学ぶ者はこれを見分けなければならない。（郝経『陵川集』卷一九「經史」）

陳植鐸氏によれば、郝経のいう「議論の学」とは訓詁学に対置されることから「義理の学」と同じ意味であり、「論文」「書信」「語録」「口義」「講義」など議論形式の文体によって著述される經書解釋学のことである。^①「論文」とは、王安石の「原性」や程頤の「顔子所好何学」などを指し、宋代以降の士大夫の文集に多く収録されている。「書信」は知識人間でやりとりされた手紙のことで、私的な内容を伝達するだけでなく、時に政治や經学、哲學的問題を論じ、多くの者に回覧されることがあったため、自己の主張を公にするひとつのメディアとして機能していた。特に朱子ら道学者にこのような書簡が多く残る。「語録」は師の言説を弟子達が記録し、編纂した著作を指し、北宋の二程子（程顥・程頤）以降、道学

を中心とする知識人の間に多く用いられた^②。また、口頭による師の経書解釈を門人が記録したものであるという点ではその性質は語録にきわめて近いのであるが、南宋の書目である『郡齋読書記』では「語録類」に分類されていない書物もある。例えば、『伊川論語説』一〇巻は、程頤による論語の解説を門人が記録したもので、口語（俚語）で記されていた^③。また、戴溪『石鼓論語答問』三巻、『孟子答問』三巻も、門人諸生との講説を記したものであるという^④。

宋代の書目では、語録類の他にも口頭による経書解釈を数多く見ることができる。それが『〇〇口義』や『〇〇講義』という書名の経書解釈書である。この形式は北宋の胡瑗にはじまり、『周易口義』『洪範口義』『春秋口義』が胡瑗の講義を弟子が記録したものであるように、その多くは太学や州学に加え、民間の私塾や書院などにおける講義録である。試みに『直齋書録解題』（以下、『直齋』）、『郡齋読書記』（以下、『郡齋』）、『宋史』芸文志から事例をいくつか挙げる。ただし、繁雑になるため、事例はいくつかに絞り、また論拠となる史料の引用は割愛する。

《易》…龔原『易講義』一〇巻（以下、『直齋』巻二）、張嶠『觀物外篇』六巻、石介『口義』一〇巻（以下、『宋史』）、陸太易『周易口訣』七巻、夏休『講義』九巻、湯養『周易講義』三巻、商飛卿『講義』一巻

《書》…張綱『尚書講義』三〇巻（以下、『直齋』巻二）、袁燮『潔齋家塾書鈔』一〇巻、曾肇『書講義』八巻（以下、『宋史』）、司馬康等『無逸講義』一巻、吳安詩等『無逸說命解』二巻、曾攸等『講義』三〇巻、洪興祖『口義発題』一巻、史浩『講義』二二巻

《詩》…趙令涇『講義』二〇巻（以下、『宋史』）、喬執中『講義』一〇巻、黄邦彦『講義』三巻、林岊『講義』五巻

《礼》…林之奇『周礼講義』四九巻（以下、『直齋』巻二）、戴溪『曲礼口義』二巻、楊簡『孔子問居講義』一巻、上官均『曲礼講義』二巻（以下、『宋史』）、江与山『周礼秋官講義』一巻、史浩『周官講義』一四巻、載溪『曲礼口義』二巻、『学記口義』二巻、胡銓『二礼講義』一巻、汪応辰『二經雅言』二巻、謝興甫『中庸大学講義』三巻

《春秋》…呂祖謙『左氏博議』二〇巻（以下、『直齋』巻三）、呂祖謙『左氏説』三〇巻、朱振『春秋講義』三巻（以下、『宋

史）、范冲『春秋左氏講義』四卷、黄叔敖『春秋講義』五卷、夏沐『春秋麟台独講』一一卷、『延陵先生講義』二卷、時瀾『左氏春秋講義』一〇卷、戴溪『春秋講義』四卷

『孝經』：袁甫『蒙斎孝經說』三卷（『直齋』卷三）、任奉古『孝經講疏』一卷（以下『宋史』）、張元老『講義』一卷

『語孟』：王雱『王元沢口義』一〇卷（以下『郡齋』卷四）、汪革『汪氏論語直解』一〇卷、詹事公『景迂論語講義』一〇

卷、晁説之『講義』五卷（以下『宋史』）、史浩『口義』二〇卷、陳儀之『講義』二卷

書名だけでは分からないが、右記の一覧中には宮廷における経筵講義も含まれている。例えば、『宋史』芸文志にある「司馬康等『無逸講義』一卷」は、『玉海』と『統資治通鑑長編』によれば、元祐五年二月壬寅に終了した邇英閣における「尚書」「無逸篇」の講義内容を、侍講の司馬康、吳安詩、范祖禹らが記録し、上呈したものであるという。^⑦このような経筵での経書や史書の講義内容を編纂した書物も少なくない。^⑧

「議論の学」の注釈書としては、他にも政敵や論敵を論破することを目的とした書物を挙げなければならない。その一つが『孟子』論争に関する書物である。古代以来、賛否両論のあった『孟子』は、宋代での論争の結果、朱子ら道学者が高く評価したことで、経書としての地位を確定する。明代の楊守陳は、『孟子』を譏った人物として荀子、王充、蘇軾、李觥、鄭樵、馮休の名を挙げる一方、評価した人物として趙岐、韓愈、二程子、張栻、陸筠、余允文、そして朱子を挙げる。^⑨恐らく楊守陳は意識的に触れていないのであろうが、宋代における孟子顕彰の嚆矢は王安石である。彼は神宗の熙寧四年（一〇七二）、科挙制度改革に伴い『孟子』を科目に組み込み、王安石自身とその息子の王雱、そしてその門人である許允成の注釈を科挙テキストとして用いた。^⑩これに対抗したのが司馬光で、彼が孟子を批判する『疑孟』一卷を著したことで、この論争は新旧両党による政争の一部となった。さらに王安石が孔子廟に配享されると、晁説之が『儒言』一卷を著して王学の徒を批判し、かたや『孟子』尊崇派からは余允文が『尊孟弁』七巻を著し、司馬光『疑孟』や李觥『常語』、鄭厚『藝圃折衷』に反駁するなど、論争は一段と激しくなっていた。

ところで、この晁説之『儒言』、余允文『尊孟弁』とも、立場を異にするものの『四庫提要』における学術的評判はすこぶる悪い。まず晁説之が『周礼』と『孟子』に否定的なのは、単に王安石が両書を尊崇したからで、恩や怨みといった主観的な感情では是非を論じるその態度は決して見上げたものではないと酷評している¹²。また、余允文『尊孟弁』についても、高宗が『孟子』を顕彰し、さらに否定派の晁説之が失脚したのを見て、単に時勢に迎合しただけのことであって、真に邪説をしりぞけ、斯道をまもるための著作ではないという¹³。つまり、清朝の学者たちは競争を目的とした経書解釈書には極めて手厳しいのであるが、学術と政治とが密接不可分な時代に生きた宋人にすれば、自己の政治的立場を経書解釈によって正当化すること自体はよくあることであつた。反王学の立場では特に二程の高弟である楊時一門がそのような学術活動に熱心であつた。土田健次郎氏によれば、楊時の『三経義弁』『字説弁』『日録弁』や、弟子の王居正による『毛詩弁学』『尚書弁学』『周礼弁学』『三経弁学外集』が知られており、その内容は「王安石の神宗に対する態度の失当、官吏の採罷の不当から、具体的な政策次元の問題、更に経書の訓詁や思想的問題」まで多岐にわたり、「多分に批判のための批判という要素」があつたという¹⁴。とすれば、次のような話もこのような時勢の然らしめるところであらう。南宋初期、経学で名の知れた知饒州の洪興祖が秦檜の命に従わなかつたので、秦檜は洪興祖が経書に託して己を非議するのではないかと疑い、彼に昭州安置、すなわち昭州での謹慎を命じたという¹⁵。

ここまでいくつかの経書解釈書の特徴を概観してきたが、このような注釈書や著作が「議論の学」である。まず「語録」「講義」などについて見たが、経筵講義を含めてこれらは、著作の前にまず師と弟子とが直接対面する学びの場があつた。そして、後でその内容が記録整理され、経書解釈書となつた。ここには様々な偶然性や特殊性が介在する。弟子が誰なのか、どのような学びの状況にあるのか、師はそれによつて何を説こうとしたのか、どのような政治的状況にあつたのか。そこでは具体的なその現場に即した議論が行われることとなるだろう¹⁶。おそらく状況が変われば、語られた内容も変わる。この点、経筵講義は明確である。皇帝に対する講義であるため、そこで求められたのは、経書の読みそのもので

はなく、テキストの内容が「治道」や「君道」に関係し、有益であるか否かである。¹⁷⁾つまり、「議論の学」というのは、経書の読み以外に何か明確な目的を持って語られるため、経書解釈は二義的な手段としての意味合いが強くなる。この側面が特に強いのが、政争や論争のための著作であった。さらにこのような著作は、読者に著者の主張を知らしめなければならなかったため、総じて懇切丁寧に多くの言葉を費やし、説得的なものとなるだろう。¹⁸⁾

そして、この時代に登場したのが、朱子の『四書集注』であった。朱子は張栻『孟子説』を批判して次のように言う。

経書解釈には必ずしも文章を作らなくともよい。ただ經文をしつかり解釈することができて通じれば、理はおのずと明らかとなり、意味もおのずと分かるのだ。近頃は文章をたくさん作って、あれこれと説きに説いているが、それではただ一方から道理を言っているだけで、経書の意味を誤認してしまっている。（『朱子語類』卷一〇三、第四七条）

すなわち、朱子は正しい経書解釈のあり方として、「文章を作り」あれこれと多くの言葉を費やした注釈書を批判する。そのため、朱子が重視したのが「訓詁」である。

（経書の）伝や注では古注のみが作文していないのに、かえってよく読める。ただ經書の句ごとに筋道立てて説き、経書の意味から離れていないところが、最もすばらしい。疏についても同じだ。近頃の人は経書の注解にすら、作文してやろうとし、その上議論を付け加えるので、いろいろと疑念を生じさせてしまっている。だからその文は読むには読めても、経書の意味からはきわめて遠くなっている。程子の『易伝』もやはり作文になっており、あれこれ説きに説いている。だから近頃の読者は経書本文をまったく読まずに、ただ伝ばかりを読んでおり、それではやはり人に思考させる方法にはなっていない。（『朱子語類』卷一一、第一一六条）

このように、朱子は古注こそが経書本文の意味から離れていないすばらしい注釈であると高く評価し、『四書集注』では訓詁を重んじた。宋学の代表である朱子が訓詁を重んじていたということは、ずっと以前より論じられてきたことであり、¹⁹⁾今あらためて強調することではないが、ただすでに南宋の黄震も、朱子の注解が時に高遠に過ぎる宋代流行の注釈とは異なり、古注に倣った「訓詁」を中心にするものであったことを的確に指摘していたことから考えて、『四書集注』の特徴がこの点にあったことは、すでに南宋の学者にも理解されて受入れられていたということをここでは確認しておきたい。²⁰⁾次章では、このような特徴のある『四書集注』に注釈が付け加えられていくその要因を考えてみたい。

① 陳植鐸『北宋文化史述論』第三章第四節「宋学精神」（中国社会科学出版社、一九九二、頁二八七）。

② 『郡齋讀書附志』は「語録類」として、二程子『河南程氏遺書』二卷、『外書』一二卷、張載『横渠先生語錄』三卷にはじまり、楊時『龜山先生語錄』四卷、謝良佐『上蔡先生語錄』三卷などの程門諸子の語録、そして朱子『晦庵先生語錄』四三卷など道学系士人の語録二四点を挙げている。土田健次郎氏は「口語の語録となると、これは道学という一派の特徴であると言ってもよい」と述べている。土田健次郎『道学の形成』序章（創文社、二〇〇二、頁二〇）。

③ 『郡齋讀書志』卷四「論語類」『伊川論語說』十卷、右皇朝程頤正叔之門人、記其師所解論語也。不為文辭、直以俚語記之。

④ 『直齋書錄解題』卷三「語孟類」「石鼓論語答問三卷、孟子答問三卷、戴溪撰、岷隱初仕衡嶽祠官、領石鼓書院山長、所与諸生講說者也」。同様の著作として、李椿年『道遙公易解』八卷、疑問二卷、呂祖謙『麗澤論說集錄』卷一〇、劉光祖『山堂疑問』一卷、劉敞『弟子記』一卷、程頤『程氏雜說』一〇卷、『伊川書說』一卷、『伊川詩說』二卷などを『直齋書錄解題』や『郡齋讀書志』に見ることができ

⑤ 前掲陳植鐸氏著、頁二八八。

⑥ 『郡齋讀書志』卷一「易類」「胡先生易伝十卷。右皇朝胡瑗撰。……此解甚詳、蓋門人倪天隱所纂、非其自著、故序首称先生曰」。

⑦ 『玉海』卷三七「芸文」「元祐無逸講義、書目、元祐五年二月壬寅、講無逸終篇、侍講司馬康、吳安詩、范祖禹等録進講義一卷」。李燾『續資治通鑑長編』卷四三八「元祐五年二月壬寅条、邇英閣講畢無逸篇、詔詳録所講義以進、今後具講義、次日別進」とある。

⑧ 他にも、耿南仲『周易新講義』一〇卷、尹焞『尹氏論語解』一〇卷、『孟子解』一四卷、范祖禹『范氏論語』一〇卷、范祖禹『古文孝經說』一卷、朱震『論語直解』一〇卷、楊時『龜山經說』八卷、尹焞『尹氏論語義』一〇卷、『五臣解孟子』一四卷、朱震『論語直解』一〇卷、尹焞『孟子解』而卷、王葆『東宮春秋講義』三卷などがこれにあたる。

⑨ 『経義考』卷二三五「孟子五」『孟子私抄七卷、守陳自序曰……後世若荀卿、王充、蘇軾、李觀、鄭樵、馮休之論、尚諱諱不已、尊信之者惟趙郊卿、韓文公、二程子、張南軒、陸嘉材、余隱之、纔幾人耳。

至朱子尊信尤至、謂其道性善、大有功於聖門也。

- ⑩ 『郡齋讀書志』卷一〇「儒家類」「王安石解孟子十四卷、王雱解孟子十四卷、許允成解孟子十四卷、右皇朝王安石介甫、素喜孟子、自爲之解。其子雱與其門人許允成、皆有注釈。崇觀間場屋舉子宗之。」

- ⑪ 『直齋書錄解題』卷九「儒家類」「尊孟升七卷、建安余允文隱之撰。以司馬公有疑孟及李遵泰伯常語、鄭厚叔友折衷、皆有非孟之言、故弁之、爲五卷。後二卷則王充論衡刺孟及東坡論語說中与孟子異者、亦弁焉。」

- ⑫ 『四庫全書總目』卷九二「子部、儒家類二、儒言一卷」。

- ⑬ 『四庫全書總目』卷三五「經部、四書類一、尊孟升三卷、統升二卷、別錄一卷」。また『尊孟升』に対する朱子の論評「読余隱之尊孟升」については、近藤正則『読余隱之尊孟升』に見える朱子の孟子不尊周への対応」（『日本中国学会報』第三三集、一九八一）を参照。

- ⑭ 前掲土田氏著、第七章第二節「楊時の立場」、頁四二九—四三〇。

- ⑮ 『經義考』卷二一五「論語五」「程瑀論語解 徐自明曰、知饒州洪興祖、以經学得名、……興祖嘗忤秦檜、檜疑興祖託經以議已、遂責昭州安置」。

- ⑯ 前掲土田氏著によれば、胡瑗『周易口義』や陳襄『周易講義』のもととなった講義が行われた時、時事問題がよく取りあげられたという（頁一一〇）。

- ⑰ 『宋会要輯稿』「崇儒七」「乾道三年九月二四日条、而今所講曲礼、類多閨門鄉党掃洒應對、飲食衣履之末、誠不足以開広聡明、裨助治道、臣实懼焉。欲乞今後令経筵官随其員数多寡分経進講、以易、詩、書、

春秋、周礼、礼記爲序、遇有六員、合講礼記、即乞除喪礼十三篇不講外、余篇中有不須講者節講、如元祐中范祖禹申請故事。また、『黄氏日抄』卷四一「読本朝諸儒理學書九、龜山先生文集」「詩、春秋、孟子略說数章、論語則経筵講義、每章婦君道言之」。

- ⑱ ここで具体例を挙げる余裕はないが、例えば、張九成『孟子伝』は「もともと不特定多数の読者を前提にした著述ではなく、聴覚を媒介とする特定の人物を対象とした、語録的なもので」、「全体的に叙述の重複がひときわ目立つのであって、懇切丁寧な説明である反面、一種のくどさや冗漫さを禁じ得ない」ものであるという。近藤正則「張九成の『孟子伝』について」（『日本中国学会報』第四〇集、一九八八）。

- ⑲ 諸橋轍次『儒学之目的と宋儒の活動』（大修館書店、一九二九、本論では『諸橋轍次著作集』第一巻、一九七五年を用いた）、頁一四。藤塚鄰『論語総説』第五章「朱子の論語集注」（国書刊行会、一九四九、頁二八七。近年の研究では、小島毅「朱熹の経解方法——『孟子』をめぐる——」（村山吉廣教授古稀記念『中国古典学論集』汲古書院、二〇〇〇）がある。小島氏は「朱熹の経学は、当時の経学をむしろ訓詁の方向に揺り戻すことによって、新鮮な成果を提供することになったのではないだろうか」（頁七〇一）と論じる。

- ⑳ 『黄氏日抄』卷二「読論語」「漢唐諸儒、不過詁訓以釈文義、而未嘗敢贊之辞。自本朝講明理学、脱去詁訓、其說雖遠過漢唐、而不善学者求之過高、從而增衍新說、不特意味反浅而失之遠者或有矣。至晦庵爲集注、復祖詁訓、先明字義、使本文坦然易知、而後抉先儒議論之精者一二語、附之以發其指要」。

第二章 朱子『四書章句集注』から四書疏釈書へ

『四書集注』に注釈を加えていく四書疏釈書の先駆けのひとつは、朱子の高弟黄榦『論語通釈』一〇卷である。門人陳宓の「題叙通釈」によれば、この書は『集注』『集義』『或問』を併せ解釈したものである。『論語集注』と『論語或問』にはもともと意見の合わないところがあるので、黄榦がかつて朱子から直接聞き取った言葉を思い出して、自分の意見を付け加えたのだという。『論語集注』という書物は簡略にして厳密な言葉で書かれ、学ぶ者には理解が難しいので、読者は朱子の意図をより深く理解するためには『集義』『或問』を博搜し、その内容に通じていなければならなかった。しかし、それは時間のかかることなので、その手間を省くために『集注』を解説する言葉を引用し、読むのに便利（「便觀覽」）なようにした。これが『論語通釈』を著した目的であるという。この本の利点は、『集注』の読解に便利であるということと、三〇余年にわたって朱子に親炙し、『集注』と『或問』との間にある疑問を直接聞いた黄榦の意見が付されているという点にある。元来、黄榦は上記の三書に加えて朱子の語録をもここに引用する計画であったが、彼は語録の信憑性に懐疑的であったため、取りやめた。^③この点は後の四書疏釈書と異なるのであるが、『論語集注』理解のために、朱子の諸書から引用し、便利さを売りにする解説書である点、その嚆矢に位置づけられよう。

何俊氏は、慶元党禁後の朱子学派拡大の要因として、朱子の著作が多く残されたことに加え、第一世代の弟子たちによる師説を祖述するための積極的な著述活動を挙げている。^④確かに、直接師に親炙した者の言葉はそれだけで説得力がある。ただ、ここで注目したいのは、師説を丁寧に祖述しようとするその活動自体に、知らず知らずの間に経書解釈に対する師の意図を裏切る方向に後学の徒を導いてしまふ、そのような契機が内包されていたのではないか、ということである。

『論語通釈』出版に際し、魏了翁は序文で次のようにいう。

勉齋黄直卿は朱文公の三書を合わせて『論語通釈』を作った。私の友人陳宓はその著作の所以を述べ、張敏則が潭州湘鄉県漣谿村でこれを刻した。私は蕭佐から善本を得て持つて帰ると、里人の趙心伝がこれを上梓して学生に恩恵を与えたらどうかと請い、しかも私にその義を述べるよう依頼してきた。ああ、この書が伝わり、士人がこれを得て知慮を増し、ますます高めたなら、学士の幸いである。論説の益は広いが、士人がそれを盗んで利禄を欺き取り、実践について何も聞くことがないということにならないか、私は憂慮するのである。（魏了翁『鶴山先生大全文集』巻五五「論語通釈序」）

この書が受入れられたのは、黄榦の著作ということもあるが、やはり『集注』を読むのに便利な書物であったからである。その便利さ故、「利禄を欺き取る」、つまり科挙受験のために用い、自己の主體的な実践に役立てようとし、そういう読み方を学生たちがするのではないかと、魏了翁は危惧しているのである。

そして、この『集注』を理解するのに「便利」であるという売り文句が四書疏釈書に受継がれていく。真徳秀『四書集編』は、「章句の疏釈として或問、語類を採るのではなく、朱子四書説の融合集大成を図った」（佐野著、頁二二九）著作であるといわれ、『集注』『或問』に加え、語録や他の著述からも朱子の言葉も多く引用している点で『論語通釈』とは異なる。『四庫提要』のこの書に対する評価は比較的高い。つまり、『或問』『語類』『文集』には朱子の「一時未定の説」や門人が記録したことによる「失真の処」が多く、読者は朱子の著作中に見られる発言の前後関係や重複錯乱を見分けなければならず、『集注』の読者は常にこれに苦しめられるが、『集編』は朱子の「去取の意」を上手く整理することでこの問題を解決しており、真徳秀の「銓択刊潤の功」があるという自賛も「虚語」ではなかうと評価している。^⑤

次いで、南宋末に著された趙順孫『四書纂疏』は、『四書集注』と『或問』を経文の「注」とし、『朱子文集』『朱子語類』『中庸輯略』や直弟子一三家の論説からの引用と趙順孫の私見を「注」に対する「疏」として位置づけている。趙順孫が序文にいうように、『四書集注』は数百回読んでも茫洋としてつかみ所が無いので、諸書から朱子の言葉や後学の解

説を引用し、読むのに便利なようにした（「便観省」というのが、この著作の目的である。^⑦

その後、元代に入り胡炳文『四書通』、陳櫟『四書發明』、倪士毅『四書輯釈』と続き、朱子の書や後学の説からの引用がますます付け加えられていく。『集注』を深く、正しく理解するためには、『或問』や『文集』『語類』を参照しなければならぬ。四書疏釈書はまずもって『四書集注』の読者がその繁雑さを避け、通読に便利であることを目的に著されたでは、そもそもなぜ『四書集注』の読者は膨大な分量になる朱子の他の書物を参照しなければならないのか。それは、趙順孫のように、後学にとって『四書集注』が分かりにくいからである。

現行の黎靖德編『朱子語類』からはそのような声を多く聞くことができる。例えば、『大学』注に「其の体は虚靈にして昧ならず、其の用は鑑照して遺さず」とあります。この二句は心について述べられたものですか、徳について述べられたものですか」（巻一四、第八六条）、「〔大学章句〕にいう「学ぶ者は当に其の発する所に因りて遂に之を明らかにすべし」は、どう理解すればよいでしょうか」（巻一四、第八八条）といった、『四書集注』の内容そのものに関する質問は枚挙にいとまがない。他にも「以前先生より『論語』『孟子』を読むよう教わりましたが、その後まだその二書について見識を得ることができず、自身深く恥じ入っております。そのためいま再びやって参りました」（巻一一五、第二〇条）、「郭友仁は初めて参り、挨拶し終えらると、疑問（をまとめた）一冊を提出した。すべて『大学』『論語』『孟子』『中庸』について常々疑問に思っているところであった」（巻一一六、第四八条）というように、明示していなくても、四書に関する質問は、『四書集注』理解に関わるものであろう。

『四書集注』は朱子が生涯をかけて最も力を入れて著した著作であった。それにも関わらず、この書についてなぜ多くの疑問や質問がなげかけられるに至ったのか。それはこの書が多くの言葉を費やし、読者に分かせようとした「議論」の注釈書ではなく、「訓詁」に重きを置くことで読者が主体的に四書本文を熟読し、聖人の意を体認していくことを目的とした注釈書であったからである。そのため注釈のための言葉は多くを費やすよりも、削られていくこととなる。

（『論語』為政「吾与回言」章について）例えば『精義』では多くの言葉を費やしているが、『集注』にはどれほどの言葉があるのか。一字は一字だが、そのなかには一字で十字にも百字にも相当するものがある。それなのに君はそれらをすべて軽く読み過ごしてしまっている。聖人の言葉は、もともと明白なもので、解説を必要としない。ただ学ぶ者には読んでも分からないので、注解を作って、彼らのために労力の半分を省いてやったのだ。もし注解さえも理解できないのなら、どうやって聖人の意を理解するというのだ。（『朱子語類』卷一九、第七六条）

読書というのは必ず自分自身で進んで取り組んでこそよいのだ。私も以前より非常に苦勞して理解したものだ。だから軽々しく人に説明しようとは思わない。やむを得ず注釈を作るに至ったが、やはり広く諸先生や先輩方の精粹を採って書き出し、それを人に読ませただけで、極めて簡要なもので、読む者の多くの苦勞を省いてやった。しかし学ぶ者たちが軽く読んでしまっているので、相変わらず何の力にもなっていない。（『朱子語類』卷二二、第七九条）

朱子にすれば、特に『論語』などの聖人の言葉はもともと明白で分かりやすいものなので、注解すら必要のないものであった。^⑧そのため、経書の本文を読み、自分の力でその意味を把握しなければならぬ。^⑨「いまは『集注』があるのだから、まずは本文に従ってじっくり読んでいけばよい」（卷一一、第七六条）というように、『集注』は本文に即して読むための補助的な役割を果たすように書かれており、「私の『論孟集注』には、一字を付け加えることも、一字を減らすこともできない」（卷一九、第五九条）、「先輩の解説は、おそらく後学の者には理解するのが難しいから、『集注』ではそれらの要点をすべて抜き出して、説き尽くしておいた。私の注脚にさらに別の説明を付け加えてはならない」（卷一九、第六三条）と、『集注』は一字の増減も許されなほど綿密に著されており、学ぶ者は一字もおろそかにせず熟読することが要求されるのである。

しかし、やはり朱子自身も時に読者の立場に立って振り返った場合、この書が分かりにくいのではないかと心配になる

こともあった。

私が作った『大学章句』『大学或問』という書物は、多く書きすぎたという欠点がある。当初はただ人が理解できないのではないかとおそれたので、説明に多くの言葉を費やした。ところが今人々が読んでも、かえって理解できないでいる。（『朱子語類』巻一四、第三七条）

朱子にすればまだ『大学章句』『或問』の言葉は多すぎると感じたわけであるが、やはり読者に分かってもらおうとすれば、朱子も多くの言葉を費やさなければならず、かといって多すぎれば読者の自得を妨げることとなる。ここに注釈の文字増減に関する朱子の苦心を見ることができ、このように朱子は読者による自得の注釈を目指し、文字数を減らしたため、あらかじめ読者からの疑問を想定しておくことにも抜かりがなかった。それが、「私が『大学或問』を作ったのは、人々が疑問を持つだろうことを恐れたため、あらかじめ質問を設定しておいて、人々に理解させるためである」（巻一四、第四九条）というように、『或問』であり、当初から「注釈の注釈」（巻一四、第四七条）として著された。『大学』を読むのには、一章ずつ取り組まなければならない。まず先に經書本文を読み、口で読み上げたら、次は『大学章句』で本文を解釈し、更に『大学或問』で『大学章句』と突き合わせる（巻一四、第四三条）というように、四書の読みは、經書本文、『四書集注』、『或問』へと広がる。それでも分からなければ、朱子のもとを訪れ直接質問するか、それも叶わなければ、書簡を用い教えることとなる。その問答の集積が『朱子語類』であり、『文集』に収められた書簡である。このような構造になっているため、朱子は『四書集注』上では言葉少なめだが、問答の場ではきわめて饒舌である。

亜夫が質問した、「大学序にいう、既に之に与うるに仁義礼智の性を以てし、又氣質の稟有り、のいわゆる氣質とは、剛柔、強弱、

明快、遅鈍などのことでしょうか」。……先生がいう「氣とは、あの初めに受けたもので、質とは、このかたちを成したものだ。金におけるあらがね、木における萌芽のようなものだ」。また「全ては同じ陰陽五行の氣なのであって、それが天地の間でたぎって、上質なものは人となり、かすは物となる。上質中の上質なものは、聖となり賢となり、上質中のかすは、愚や不肖となる」といわれた。（『朱子語類』卷一四、第五五条）

ここでの朱子の返答は、弟子の罫淵（字は亜夫）に向けられた『集注』の解説としての意味を持っており、本来はその時、その場に居合わせた者たちに合わせた偶然的で限定的な問答であった。ところが、この問答は、趙順孫によって『四書纂疏』に引用されることで、普遍的な意味を持つようになる。つまり、洪天錫が「問う所は一人にあらず、答える所は一日に非ず」（『四書纂疏序』）というように、『四書纂疏』を読む者は、経書本文から『集注』へ、そして朱子の口頭による解説へと辿ることで、朱子に師事した弟子の経験を追体験することになるのである。この意味で、かつて偶然行われた問答は、ある特定の門人のためだけではなく、後世に広がる読者一般に向けた普遍的な意味を持つことになる。¹⁰⁾

しかし、朱子自身はこのような注釈に注釈を重ねていくという営為を望んでいたであろうか。例えば、『論語或問』をなぜ刊行しないのかという弟子の質問に対し、「そんな必要はないだけだ。文章が多くなればなるほど、学ぶ者はますます何もしようとしなくなってしまう。ただ『集注』を読むだけで十分だ。君は『集注』の説をすべて覚えきっているのか。『集注』どころか、おそらく経書の本文すら覚えきっていないだろう」（卷二一六、第五一条）というように、読むべき文章が多くなることを、経文理解の観点から強く警戒している。注釈とは経文を理解するための手段であって、注釈の注釈が増えれば、読者は注釈ばかりを読み、経書の本文そのものへの取り組みを忘れてしまう。朱子はこれを警戒した。

前章で論じたように、多くの言葉を費やす「議論」形式の注釈こそまさに朱子の警戒したそれであった。そして、朱子の著作物でいえば、『四書集注』の解説である『或問』や、朱子による口頭での解説を集めた『朱子語類』、書簡を収めた

『文集』などが「議論」形式の書物に分類できるだろう。このように考えるなら、朱子が本来「訓詁」を重んじて著した『四書集注』に、『或問』、『語録』、『語類』などの口語問答体、『朱子文集』の文章、さらには朱子後学の論説をふんだんに引用することは、その注釈書としての形式が「訓詁」から「議論」へと質的に変換されたことを意味するだろう。

その証拠に、『四書纂疏』に引用されたもので、朱子の著作以外の書名を挙げれば、黄榦『通釈』『文集』『講義』、陳淳『字義』『文集』『庸学講義』、輔広『語孟問答』、潘炳『講説』、蔡淵『易伝』『庸学思問』『中庸通旨』、蔡沈『書伝』、蔡模『語孟集疏』、陳孔碩『講義』、陳埴『經説』『木鐘集』、胡泳『衍説』、葉賀孫『講義』『文集』、黃士毅『講義』、真德秀『大学衍義』『読書記』『文集』というように、ほとんど前章で論じたところの「議論」形式に属す著作である。そもそもこの書によって実際に朱子や学友の側に侍るが如き体験ができるという洪天錫の売り文句は、黄榦による語録の効用に同じである^⑫。

四書疏釈書は、古注における注と疏の關係に対比される。しかし、古注の場合、疏は注の訓詁に訓詁を積み重ねたものであったが、四書疏釈書の場合は、『四書集注』とその解説として付された疏との間には明らかに質的な違いがある。注釈に注釈を重ねることへの朱子の警戒は、この質的転換への警戒であったといつてよい。このように朱子が警戒するのは、彼が存命中から門人の学びにその傾向があつたからである。

近頃の人は書物を読んでも、その多くは自分に引きつけて体得しようとせず、ただ文字だけ読んで、文章の意味を説明することができればそれでよしとしている。こんなことで何になろう。……今の人は道理に取り組もうとせず、すべて書物を涉獵し、該博であることを能としている。道学と俗学との違いはここにある。……經典の注解はやむを得ないことであるが、もしただ注釈に従つて説くだけなら、一体何になろう。（『朱子語類』卷一一、第四〇条）

このように、朱子は経書を自分に引きつけて体得する学問を「道学」、文字上だけの理解にとどまり、注釈のための注釈にとらわれている学問を「俗学」という。ただ本を読むだけの「俗学」に対する朱子の批判は厳しい（『語類』巻二〇、第六條）。さらに「君は『論語』を読んで、文章の意味をしつかり理解できているのか。もし文義がまだ理解できていないのに、ある学者はこう言っている、またある学者はああ言っていると読み散らしていたら、そのうちすべてごちゃ混ぜになって何も分からなくなるだろう」（巻一一四、第二六條）という発言からするに、朱子および直弟子一三家の説を引用した趙順孫『四書纂疏』、それからさらに北宋から元代までの七一家を加えた胡炳文『四書通』などの疏釈書を朱子はどのような思いで見えるだろうか。「経義に合っているか否かはその論じるところではなく、ただ注の意に合っているか否かでその是非を定めている」（『四庫全書総目』巻三六「経部、四書類二」）と評された『四書通』が、経文から離れた注釈のための注釈書だと朱子に一蹴されたとしてもおかしくないだろう。

このように「ただ文字だけ読んで、文章の意味を説明することができればそれでよしと」する「俗学」の連中こそが、朱子の死後、四書疏釈書を求め受容していったのである。ただ直弟子だけでなく第二第三世代の弟子が注釈の注釈をさらに必要としていったのは、『四書集注』が訓詁に重きを置いたため、特に初学者には難解であり、もともと朱子による追加の解説がなければ十分な理解に到達できない書物であったからである。その意味で『四書集注』は朱子と弟子達との面会や書簡を通じた日常的な繋がりを前提に書かれていたのであり、その死後は、朱子を中心とするネットワークが消滅したからこそ四書疏釈書が必要とされたといえるだろう。

四書疏釈書が生み出され、受容された要因としてもう一つ考えなければならないのが、朱子学解説書に多く見られる類従編纂という編集方法についてである。例えば、朱子の盟友張栻は、程子の書を理解するために、孔子・孟子の「仁」に言及した言葉を類従編纂した『洙泗言仁』という書物を作った（『南軒集』巻一四「洙泗言仁序」）。ところが、朱子にいわせれば、「仁」について直接言及している所だけを抜き書きして理解させようとすることは、読者に学問に対する拙速さや

近道を好む心を助長させる危険な書物であった（『朱子文集』卷三二「答張欽夫」第六書、第九書）。このように、朱子は類従という編集方法自体を厳しく批判する（『語類』卷一一八、第四九条）。

しかし、朱子の懸念にもかかわらず、学ぶ者の類従への要求は抑えがたく、滕洙（字は希尹）は、孔孟が「仁」を語った大略を抜き出して一編をなし、日夕これを玩誦したといひ（『朱子文集』卷九四「滕君希尹墓誌銘」、童伯羽も同様に「仁」の説だけを類従しようと考えていたところを朱子にたしなめられ（『語類』卷一一八、第一〇条）、罍淵もやはり「仁」説の抜き書きを作ろうとしたという（『語類』卷二〇、第一〇八条）。さらに『洙泗言仁』は朱子没後も後学によってシリーズ化され、孔従龍という人物が『論語』から「学」を言うところを抜き出した『洙泗言学』を作り、朱子と同じ観点から『洙泗言学』に警告を発する真徳秀も、類従的書物である『西山読書記』では言い訳しながら「仁」の抜き書きをしている¹⁴。また楊汲という人物は程子の「敬」に関する言葉を六目七〇条に類従した『河洛言敬』を著し、それに序文を寄せた方回「はもはやそれをたしなめることなく、むしろ歴代の類従形式の書名を挙げ、『洙泗言仁』は万世に功あり、『河洛言敬』は聖門に功あり」と、類従の効用を堂々と説くに至っている¹⁵。

張栻『洙泗言仁』という書名は、朱子の類従批判とともに記憶され続けるのであるが、皮肉にも『朱子語類』を代表として彼の言葉は後学の手によって分類整理され、それによって体系化された朱子学として受入れられていく。すでに知られるように、朱子の「語録」は現行の黎靖徳『朱子語類』一四〇巻の他にも、楊与立編『朱子語略』（一二三〇頃）、葉士龍編『朱子語録格言』（一二三八年）、胡常編『晦翁語録彙編』（一二四三年）、晦庵先生語録大綱領（咸淳年間の初め頃まで）といった「語類」として整理されていく。他にも王泌『紫陽宗旨』、張洪・斉熙編『朱子読書法』、滕珙『經濟文衡』、陳淳『北溪字義』、宋儒の遺文を分類編纂した熊節編『性理群書句解』といった、『文集』や「語録」を再編成した二次的編纂物が次々に著されていった。

ここで注目したいのが、これら朱子学解説書が、『文集』や「語録」から朱子の言葉を取り、分類編纂したものである

点において、四書疏釈書の編纂方法に似ているということである。特に陽枋編『朱文公易問答語要』（易について）、史守文編『朱文公五書問答』（易・論語・孟子・大学・中庸について）、潘埴『晦庵語類』（論語について）、黃士毅『晦庵書說』（書について）、黃大昌・王迂編『經說』（各経書および太極などについて）、李春叟『論語伝説補』といった書物は、経書ごとに朱子の言葉を整理し直したという点において、きわめて四書疏釈書の編纂方法に近い^{①⑦}。

朱子が何度も何度も弟子に繰り返し説いたのは、「仁」「性」「命」「理」「道」といった道学的抽象概念を知ることや「敬」という修行は、言語文字上でその概念を知っただけでは何の意味もなく、経書を自ら熟読し、日常生活においてそれを実践していく、そういう修行を通して、自得体認しなければならぬということだった。そのために、朱子は訓詁に重きを置いた注釈書を作ったのである。

朱子の注解の特徴は、「音から訓へ、訓から義へ、一字から一句へ、一句から一章へ、そして言外の意に至るまで^{①⑧}」といわれるように、一文字の音や意味から積み上げていき、そして経書に込められた「言外の意」、つまり聖賢の意を明らかにしていることにある。朱子は「敬」について、「解説は必要ない（「不用解説」）」（『語類』卷一二、第一〇五条）とか、「訓詁することはできない（是不得而訓）」（『語類』卷一五、第一四一条）と、言語文字による解釈を拒否する。しかし、まず言葉上の意味から理解したい多くの門人たちは、朱子の意に反して、何度もその意味を質問する（同前）。いつも拙速に学問の完成を目指す門人たちはいくら朱子に叱られようと、言葉によって「言外の意」をも理解しようとした。このような門人たちの学問に対する要求が、類従的朱子学解説書を多く生み出した原因であり、四書疏釈書の誕生とその拡大も同じ現象の一つの展開であつたと理解できるのではないだろうか。

① 『直齋書錄解題』卷三「語孟類」では『論語通釈』十卷とあるが、

『読書附志』「経解類」では『論語註義問答通釈』十卷とあり、『経義考』卷二一七「論語七」でも『論語註義問答通釈』とする。ちなみに

朱彝尊は「未見」とする。

② 鄭元肅『勉齋先生黃文肅公年譜』嘉定二二年、始通釈文公論語条。

③ 同前。

かし、楊簡がひとり異彩を放ちつつ陸学思想を継承したのを除き、袁燮、舒璘、沈煥は朱子学の影響を強く受け、さらに楊簡の弟子の中でも陸学の中心的存在であった錢時（字は子是）も「朱子学に非常に接近した思想」を持つに至り、陸学は「その活力を失うに至った」といわれる。^③そして元代になれば朱子学の勝利は明らかであった。南宋末から元代に生きた劉壎（一二四〇—一三一九）は「象山語類」に寄せて次のようにいう。

象山先生の『陸文安公語録』一冊、『遺訓』二冊は、門弟子が各々編纂したもので、言葉の多くが重複していた。そこで『晦翁語録』に倣って（象山の語録を）テーマごとに分けて抜き書きし、重複したものは削除して、ようやく見るべきものとなった。壎は三たびつつしみ嘆いて言った、陸先生は真人である。ほんの少ない言葉でつまらない固陋な見識を打ち破り、その英悟にして傑出したさまは孟子に並び立つに十分である。しかしその学問が朱学の盛行に及ばないのは、思うに先生は長寿ではなかったが、朱文公は長生きし、先生は簡易を心がけて書物を著されなかったが、朱文公は著述が多く、先生の門人たちは官僚として栄達しなかったが、朱子学団には高官に達し、その教えを広める手助けをしたものがいたからであろうと。（劉壎『水雲村稿』巻七「象山語類題辭」）

確かに朱子（一一三〇—一二〇〇）に比べ、陸象山（一一三九—一二九三）の方が短命であったという指摘は、朱陸論争を考える際、案外重要であろう。というのも、例えば陸学門下の包揚（字は顯道）は、象山の死後、その門下生一四名を率いて朱子の精舎を訪れ弟子の礼を執り、講学に参加している。^④包揚は朱子との問答を四巻にまとめるなど、朱子説の伝承に重要な役割を果たしており、兄弟の包約・遜とともに『宋元学案』では象山門人を集めた「槐堂諸儒学案」に伝があるのに加え、「晦翁学案下」では「晦翁門人」とされている。^⑤また、趙師雍（字は然道）も同様に朱陸両方に師事しつつも、象山亡き後、朱子との結びつきを強くしたため、朱子の弟子のひとりに数えられている。他にも彭興宗（字は世昌）という

象山書院を管理していた象山の弟子は、象山が存命中書院に書物を所蔵しようとしなかったたので、象山の死後、書物を求めて朱子のもとを訪れたという。^⑦ 彭興宗は朱子門人ではないが、象山の死後、朱子をたよる陸学門徒の様子を見ることが出来る。南宋の学术界がなぜ朱子学に収斂していくのかを考えるとき、学者の卒年を比較することは重要である。^⑧

さて、本論がここで特に注目したいのが、劉壎が著作量の差を指摘するところである。例えば、その差は『朱子全書』（全二十七冊、上海古籍出版社、安徽教育出版社、二〇〇二）と『陸九淵集』（二冊、中華書局、一九八〇）を比べれば一目瞭然である。『象山語類』は『晦翁語類』に倣って『陸文安公語録』と『遺訓』をテーマごとに分類し直し、抜き書きしたもの（分門鈔纂）であるが、「語録一冊、遺訓二冊」というのは、黎靖德編『朱子語類』が一四〇巻であるのに対してやはりさみしい数字である。『直齋書錄解題』では、朱子の「語録」「語類」として黃士毅編『晦庵書說』七巻、潘埤編『晦庵語類』二七巻、李道伝編『晦庵語録』四六巻、李性伝編『晦庵統録』四六巻、包揚編『文説』一巻を載せ、『読書附志』「語録類」では、『晦庵先生語録』四三巻、『晦庵先生語統録』四六巻、楊与立編『朱子語略』二〇巻、呉必大編『師誨』三巻『附録』一巻、蔡模編『統近思録』一四巻を挙げるが、両書目とも陸象山の語録は載せない。^⑨

いうまでもなく、この著作や語録類の量の差は、両者の著作や読書に対する考え方の相違を反映している。つまり、「窮理」や「格物致知」の工夫による客観的知識の獲得を重視する朱子は「道問学」（問学に道る）を、「心」の確立を第一とする陸象山は「尊徳性」（徳性を尊ぶ）を宗とし、読書による経書理解を求める朱子は、経書に対する注釈に熱心であり、著述も多いが、かたや読書による知識の獲得に重きを置かない陸象山にとって事細かな概念説明や著述そのものは、正しい学問のあり方から離れた行為であるため、著述には積極的ではない、と一般的に理解されている。

朱子に著作が多く、在世中から自著の印刷出版に熱心であった理由として、彼が宋代中国で有数の出版業が盛んな福建、とくに建陽という多くの出版業者を出した地域で学術活動を行っていたことも指摘されて久しい。^⑩ 朱子は意図的に自ら印刷物という新しいメディアを利用し、自説の拡大と普及に熱心であった。小島毅氏によれば、「印刷出版技術を活用して

自己の教説を広める戦略を自覚的に採っていた点で、朱熹には新しいメディアへの確かな見通しがあった」のであり、「朱陸の抗争は、情報戦略において前者の圧勝であった」という。^⑪

確かに、朱子の学問論は、宋代社会に広がる出版印刷文化に適合していたといえるだろうが、では陸象山の学問が朱子学の盛行に及ばなかったのは、その学説がこの時代に適合していなかったからだということになるのだろうか。

例えば、「尽心」とはどのようにすることか、「性」・「才」・「心」・「情」はどのように弁別すべきかを質問した弟子の李伯敏に陸象山は次のように答えている。

吾友のこの言葉なども、やはり枝葉末節なことである。そうは言っても、これは吾友だけの間違いではなく、世を挙げての弊害である。今の学ぶ者の読書はただ文字を解釈しているだけで、血脈を全く求めようとしていない。たとえば情・性・心・才というのは、すべて同じ物事で、言葉がたまたま違うだけである。（『陸九淵集』卷三五「語録下」）

まず象山は質問者の李伯敏に対して、このような質問をしたこと自体を批判する。ここに彼の「言語・文字を媒介とする主知的な理解を最優先させる（言説）中心主義の立場」^⑫を嫌う姿をうかがい知ることができると同時に、それを理解することに苦心する弟子の姿も見取ることができる。しかし、やはり質問者側の立場からすれば、このような道学特有の概念を師に問うことは、何ら問題ではないのではないのか。むしろ、それこそが道学集団に属することではないのか、という疑問も生じよう。前章で論じたように、朱子なら文字言語上だけの学問にならないようにとの条件を付けながらも、懇切丁寧にそれぞれの概念について説明するだろう。陸象山が「世を挙げての弊害」や「今の学ぶ者」ということから、むしろこのような質問をする方が主流であったことを表わしている。そのため、李伯敏も彼なりにこの返答には満足できず、「ではこれらは名称が異なるだけなのか」と更に質問する。これに対して陸象山がいう。

（言葉で）説明するには及ばない。（言葉で）説明するのは良くない。……もしどうしても（言葉で）説明したいのであれば、天に在るものが性で、人に在るものが心である。これは吾友の質問に答えて言ったのであって、本当はこのように説明してはいけない。

（『陸九淵集』巻三五「語録下」）

李伯敏が求めていた答えは、「天に在るものが性で、人に在るものが心である」という師の説明だっただろう。だが、陸象山からすればこのような文字の解説（「解字」）は、学問上の枝葉末節であり、むだ話（閑言語」「閑議論」）なので、必要に駆られて（「若必欲説時」）、そう答えたにすぎない。

しかし、だからといって象山自身が読書や講学、文字言語概念の分析的説明を全くしなかったというわけではない。

（「今時の学ぶ者の読書は、ただ文字を解釈するだけで、血脈を全く求めようとしない」という象山の言葉について）私が思うに、天下で読書をして血脈を求めない人がいなかったことなどないし、象山も読書して、いまだかつて文字を解釈しなかったことでもないのか。（象山は「経書を読むのには、必ず注疏及び先儒の解釈を読まなければならない」とも言っているが、この言葉はどうしたことか。……象山の学では「この心はおのずから霊なるもので、この理は自ずから明らかで、外に求めてむなく議論を為してはならない」といつているが、しかし（象山も）いまだかつて読書をせず、講義授業をせず、経書を論拠に分析することなど一度もなく、すべてやっていることは他の儒家一般と同じではないか。（黄震『黄氏日抄』巻四二「読諸儒書十」）

南宋の黄震は、このように陸象山も「読書」、「講授」（講学）、「援經析理」（経書を論拠に分析する）をしているのではないかと批判的に指摘する。彼は朱子学陣営に属するため、その批判的な口振りにには注意が必要であるが、確かに象山も読書・講

学しないわけではない。むしろ象山は読書・講学を全くしないと言い切る方が難しい。では、象山があれば嫌悪した「援經析理」はどうか。

例えば朱陸の間で論戦となつた有名な「無極太極論争」がある。これは朱子の重んじた周敦頤『太極図説』の冒頭部分「無極而太極」の解釈をめぐる朱子と陸象山・梭山（名は九韶、字は子美、兄弟との間で交わされた論争である。すでによく知られた論争であるため、行論上必要な陸象山の主張にポイントを絞って論じる。ことの発端は、朱子が「無極而太極」という五文字を継承し、その存在論の根本に据えるのに対し、まず兄の陸梭山が『太極図説』はもう一つの周敦頤の著作である『通書』と内容が似ていないことから、周敦頤の著作ではなく、たとえそうだとしても未定の書であろう、もしくは他人の文を誤って伝えたのだろうと、『太極図説』そのものを信賴の置けない書物だと指摘したことに始まる。当初、その論難は朱子と陸梭山との間での書簡の往復によってなされていたが、淳熙一五年（一一八八）から梭山の意を汲んだ陸象山が朱子に書簡を送り、この論争に参加することとなった。梭山はすでに『通書』には「五行、陰陽、太極」への言及はあるものの、「無極」という言葉が見当たらないとの梭山の指摘に加え、象山は次のような証拠を挙げている。

〔朱子の「無極を言はざれば、則ち太極、一物に同じくして、万化の根本となるに足らず。太極を言わざれば、則ち無極、空寂に論みて、万化の根本となる能わず」に対する反論〕

○『易』の「大伝」に「易に太極有り」とある。聖人が「有り」と言っているのに、今「無し」というのはなぜか。「大伝」を作る時には「無極」を言わなかった。「太極」がどうして一物に同じで、万化の根本となるに足らないことがあるのか。

○『書』の「洪範九疇」の第五に「建つるに皇極を用う」とあるが、ここでも「無極」の語がない。

〔朱子の「無極は即ちこれ形なし。太極は即ちこれ理あり。周先生、学者太極を錯認して、別に一物となさんことを恐る。故に無極の二字を着けて、以てこれを明らかにす」に対する反論〕

○『易』の「大伝」に「形而上なる者、これを道と謂う」とあり、また「一陰一陽、これを道と謂う」とある。「一陰一陽」はすでにこれだけで「形而上」なるものであり、「太極」についてはいうまでもない。文義を理解している者ならだれでも知っているはずだ。「大伝」が著されてから今に至るまで何年経っているというのだ。これまで「太極」をそこに存在する「ある物」のことだと誤認した人がいたなんて話は聞いたことがない。

○「極」とは「中」のことである。「無極」というのは、それはちょうど「無中」というようなものである。もし学ぶ者が形に拘泥しないかと懼れて解釈を付け加えるなら、『詩』『大雅』が「上天の載」の下に「無声無臭」というようにすればよい。どうして「無極」の字を「太極」の上に追加してよいものか。

○朱震（謝上蔡の弟子）が「周濂溪は、『太極図』を穆伯長から受け、伯長の伝は陳希夷から出ている」というが、きっと考えあつてのことだろう。陳希夷の字は、老子の字である。「無極」の二字は『老子』の「知其雄」章に典故がある。吾が聖人の書物にあるのではない。『老子』の首章に「無名は天地の始め、有名は万物の母」とあり、……「無極にして太極」とは、すなわちこの旨である。

○『太極図説』では「無極」の二字を冒頭に冠している。しかし、『通書』では最初から最後まで全く「無極」の字には言及していない。

○二程の言論や文章は非常に多い。しかし、これまた全く「無極」の文字には言及していない。たとえ当初はこの図があつたとしても、その後、全く「無極」の字に言及していないところを見れば、その（『太極図』）の道理を進展させて是とはしなかったたのである。このことをしっかりと認識すべきである。

これは、陸氏兄弟が「太極」の上に「無極」を付け加えてはならないということを経証立てて論証した一部である。象山¹³には朱子の空言に反論、訂正することのできる「証拠」があるのだという（或稍用尊兄泛辭、以相繩糾者、亦差有証拠）が、

「証拠」とは經典の「古書」である。「古書」によれば「無極」の説に信憑性がないことは明らかである。それにも関わらず朱子は「古書」を信用せず、新しい時代に書かれた『太極図説』ばかり信じて「極を以て形となしてしかも中となすを得ず」とか、「一陰一陽を以て器となして、しかも道となすを得ず」というが、これは自分の心のみを信じた憶測に過ぎないと象山はいう。さらに、象山は、

字義にはもとより一字でいくつかの意味を持つものがある。字を用いる時にも、一つの意味の字もあれば、いくつかの意味を兼ねて持つ字もある。さらに文字の意味には、虚実がある。虚字はただその文字の意味を論じなければならない。実字はその文字が指している実体について論じなければならない。その指している実体を論じるなら、字義にこだわる必要はない。……太極や皇極というのは、すなわち実字である。指している実体がどうして（別々に）二つあるだろうか。（陸象山「与朱元晦」第二書）

と、「字義」とは何か、つまり一字一字の文字の意味は如何に捉えるべきかというレベルから条理立てて論じる。言語文字の意味を分析的に理解することは、朱子こそ得意とするところではなかったか。陸象山からすれば、朱子の得意とする「一句一句を論じ、一字一字を議論する」、「訓詁文義に精通する」方法を用いて、逆に朱子を論破することに成功したとの思いがあった。「心を落ち着けて観る」ことを陸氏兄弟に求める朱子に対し、陸象山はそのような決して意見の一致に結びつかない主観的な方法ではなく、「事に拠りて理を論じる」明白かつ客観的な方法で結論を明らかにすべきだという（与朱元晦「第一書」）。ここに我々は、陸象山の「援經析理」の態度を見ることができよう。

加えて注目したいのが、この論争が互いに相手を論破するだけを目指していたのではなかったことである。両者とも、自説の支持者を広めるべく、メディアを積極的に活用した。そもそも朱子が『太極図説解』を完成させたのは、乾道九年（一一七三）のことであった。朱子はこの時『通書解』を同時に完成させているのであるが、両書ともにあまり公開せず、

張栻など数人の友人に見せるにとどめていた。その後、『太極図説』の諸本を手に入れて校訂を続け、淳熙六年（一一七九）になってようやく任地の南康軍で印刷し、公開した。ところが、公開したことによって、この書に対する批判が見られるようになる。そして淳熙十五年（一一八八）正月一四日、陸象山が朱子宛てに書いた書簡「与朱元晦書一」が届けられたことで、「無極太極論争」が始まったのである^⑭。

当初私は『太極』『西銘』の注釈を作ってから、これまで敢えて公開して人に示そうとはしてこなかった。近頃儒者たちが両書の欠点をたくさんあげつつあって、あるいは全くその文章の意味に通じていないのに、妄りにけなしてくることに、私は心を痛めていた。そこでこの注釈を世間に出して学徒に示し、その伝を広めさせることで、願わくば、読者が文字から意味を把握するようになり、軽々しく議論すべきではないことを知って欲しいものである。（『朱文公文集』巻八二「題太極西銘解後」）

この跋文が書かれたのは、陸象山からの書簡を受け取った翌二月のことである。つまり、朱子は陸氏兄弟等が「両書の失」をあげつらい、その「文意」も分からずに妄りにけなす（詆訶）ことに心を痛め、該書を印刷し、広く普及させようとこの一文を書いたのである。^⑮ここに、論争に際して相手を論破するだけでなく、自説を広めることによって自説の正しさを知らしめようとするメディア戦略を見ることができるところが朱子によれば、陸象山こそ自説の拡大に余念の無い人物に思われた。

陸子静の手紙がとどきましたが、全く道理になっておりません。彼はいつも本心をかくして、あえて公開して人に示そうとしな

いのですが、彼がこんなに正体を暴露するとは思いませんでした。……彼があなたに与えた手紙は、彼からも写しを送ってき

ました。おそらく大変得意になっているのでしょう。おおむね彼はさまざまな文章を書くと、たいていすぐにそれを四方にばらま

人が知ってくれないことをただひたすら恐れています。これが彼のいつものやり口ですから、今度のことも別段怪しむには足りません。（『朱子文集』巻五五「答邵叔義」第四書）

一般的に陸象山といえ、文字言語の理解に拘泥することや、言葉の上だけの議論に批判的であったといわれるが、ここに見るように、時に文義にこだわらず、条理立てて、論理的分析的な文章を書くことに、象山自身きわめて得意であった（『吾文条析甚明』という一面も見逃してはならない。¹⁶「条析」明らかな文章を書くことと、自説を広めることは密接不可分である。逆に言えば、誤解なく自説を知ってもらい、広めるためには、条理立てて、分析的に説明しなければ説得力がない。象山も朱子同様に「人に知ってもらう」ために、「条析甚だ明らか」な文章を書いたのである。

紹熙三年（一一九三）、陸象山が五四歳で亡くなると、息子の陸持之（字は伯微）ら後学の手によって文集や語録が整理編纂されていく。『宋人別集叙録』によれば、南宋で刊行された『陸象山文集』のテキストには四種類ある。第一に陸持之が象山の「遺言」を集め、開禧元年（一二〇五）に楊簡序を付し刻した「臨汝本」、第二に欠略が多かった臨汝本を陸持之自身がさらに増益し、嘉定五年（一二二二）に袁燮序を付し刻した「江西倉司本」、第三に呉杰が江西倉司本に「行状」と「謚議」を付け加え、嘉定一三年（一二二〇）に呉杰序を付し刻した「建安陳氏坊本」、第四に紹定四年（一二三二）に袁燮の子甫が倉司本を覆刻した「覆刻倉司本」である。¹⁷

テキスト上には特に大きな変化はなく、収集しそこねた遺文を加えて増補していこうという意図や、序文で先人を顕彰しつつ、その文章の効能を説くことなどは一般的な文集編纂の態度とあまり変わらない。例えば、袁燮序にいう。

ああ、先生の後学を恵むことはなんと広いことか。先生の言葉は悉く心（中）からでており、上は君主の心を豊かにし、下は同

志に切磋琢磨させ、さらに下には庶民を開化する。その他の様々な著述に至っても、すべてこの心である。儒釈の分かれる所以、義利の分かれる所以について、白黒を分かつように、その分析は極めて精密である。俗学の氾濫を防ぎ、天下をすでに溺れた状態から救う。吾が道の統盟はここにあるではないか。（袁燮『契齋集』卷八「象山先生文集序」）

このような師の言葉を多く残そうとする意識は、次に師の言葉を解説し、その言葉に込められた意味をよりはっきり後学に伝えようとする意識を生む。例えば象山の高弟のひとり傅子雲（字は季魯）は、陸門の中では非常に著作が多く、『易』『詩』『論語』の注釈（『易伝』、『論語集伝』）、そして『孟子指義』、『中庸大学解』、『童子指義』、『河図洛書釈義』、『離騷経解』、『撰著説』があったという。これらの書は早くに失われてしまい、その内容の詳細は不明であるが、陸象山の「年譜」によれば紹熙三年春正月一三日、陸象山が吏民を集めて「洪範五皇極」一章の講義を行った。象山はさらに「河図・洛書」に関する著作を書くつもりだったが、それがならなかったので、傅子雲が『釈義』を作って象山の意図を明らかにしたのだという。これが『河図洛書釈義』であろう。とすればその他の著作の多くも師説を敷衍するために書かれたと考えられる。黄震によれば、師説を守るために、傅子雲は著作に積極的であり、それによって「象山と朱子の説を区別」することや、「数万言」を用いて仏学を排斥することに熱心であり、「博学多聞で、好んで議論をした」という¹⁸。多くの言葉を用い、議論を展開することで師説を守ろうとした点、朱子学徒と何ら変わらない。

陳苑（字は立大、一二五六―一三三〇）は象山の第四世代の弟子で、すでに振るわなくなった陸学の「中興」に位置づけられる人物である。朱子学が科擧に用いられ、陸学をあえて学ぶ者もいなくなった時代にあつて、彼は自己の意見なく、世俗に従って生きることを嫌った。こうした精神は陸学に適合し、陸象山の書を読んだ陳苑は、そこに自己の「知」と「行」を高めてくれる何かを見出したのである。おそらく「残編断簡の中」（『宋元学案』卷九三「静明宝峰学案」）から彼は独学で陸学を学んだ。このような状況下で頼るべきは書物しかなく、彼は「陸象山の書およびその門人の楊敬仲・傅子

淵・袁広微・銭子は・陳仲和・周可象が著した『易』『書』『詩』『春秋』『礼』『孝経』『論語』などに関する書を徹底的に採し求め、「これらの書を読むことで益々喜び、益々知り、益々行つた」という。このように、陳苑の陸学理解は読書量、つまり求め得た書物量とともに進むこととなる。²⁰ 傅子雲は多くの言葉を費やして師説を守り伝えようとし、陳苑は可能な限りの陸学関係書を集めた。ここには陸象山の学問を伝えるために（学ぶために）、たくさん残したい（たくさん読みたい）という量への志向を読み取ることができる。

しかし、陸学の徒として、このような量への志向を抱くことは正しいのだろうか。確かに師の生き生きとした言葉に接することで、直接師に面会したことのない後学にも、師の立体的なイメージを伝えられるだろう。だが、師の言葉の上に言葉を重ねていくという学問のあり方は、師の教えに反するのではないのか。

嘉熙元年（一二三七）、『象山語録』を最初に上梓した陳垣の序文から、このようなジレンマを読み取ることができる。

陳垣（字は和仲、一一九七—一二四一）²¹は、楊簡の弟子で、陸象山に直接師事できなかったことから陸学への思いは人一倍強く、語録の出版を進めた。

ある人が垣に言うには、近頃の儒者は事細かに論じ、その門徒たちが競ってその記録を公にしている上に、さらにその後学の者も（師の言葉を）拾い集めて写し伝え、すでに汗牛充棟の状態であるのに、未だにそれに厭きて止めようとしなない。なのにあなたが手に入れたもの（陸象山の言葉）は、甚だ簡約ではないかと。そこで垣が言った、先生の道は青天白日のようにはっきりしているのです、どうして言葉を用いる必要がありますでしょうか、先生の言葉は震雷驚霆のようであるのに、どうして記録する必要があるのでしょうか。記録して刊行したとしても、やはりこれは余計なものなのです。（『陸九淵集』卷三六「年譜」）

門人子弟は師の言葉をとにかく多く残すのが当時の常識だった。陳垣はそういう常識に対し、言語を用いないのが陸学の

教えて、これだけでも陸学には余分（猶以為贅也）である、多すぎるといふ。この説明はあまりにも苦しいのではないか。では何のために『語録』を出版するのか。ここに陸学のジレンマがあるだろう。しかし、それにも関わらず陸学の言語不要論は強調され続ける。この点を強調したのが元の呉澄である。

陸先生の学（の本質は）、言語文字にはない。故に朱子の語録は累々百余卷に及び、どうしてただ千万億言だけということがあろうか。しかし陸象山の語録は、わずかに一帙だけである。この一帙ですらまた無くてもよいのである。……朱子の言葉は諄諄にして、記録されたものの多くは重複しており、陸象山の言葉は峻潔で、記録されたものは暗劣であるが、これは語録の欠点である。それ故無くても良いと言ったのである。陸門の高弟傅季魯、人は称して琴山先生と呼んでいる。その玄孫の傅斯正が私に、語録一篇、記す所三五条を提示してきた。その中の五条はすでに『陸先生語録』に載っているものであったが、これを出版して世に伝えようとしていた。そこで私は言ってやった、これを伝えても世美を明らかにするに足らず、これを観ても家学を得るに足りない。孟子が「万物は皆我に備われり。身に反って誠、樂しみこれより大なるは莫し」といつている。傅から陸に遡り、陸から孟子に遡ることが出来るのは、ここにあるだけである。どうして語録など用いる必要があるうか。わたしはこのように言ったのだが、その出版への意思是已みがたく、ついにこれがためにその篇端に題することにした。（呉澄『呉文正集』卷一「金谿傅先生語録序」）

陸象山の語録はわずが「一帙」であるが、それさえも無くて良い（其一帙者亦可無也）というように、朱陸の対比の中で陸学の本質が「言語文字」にないことを主張している点に注目したい。すでに知られるように、呉澄は朱子後学について、「訓詁」「講説」を精密にすることのみに止まる陳淳や饒魯の学問を「記誦詞章の俗学」と呼び、これを「徳性を尊ぶ」ことに重きを置かない「嘉定以後、朱門末学の弊」と呼び、また朱子の『四書』を尊び暗誦することはするが、自己の身心に引きつけ、実践に結び付けることを知らない「今世の士」を「四書の罪人」と呼ぶ。呉澄は朱子学と対比するこ

とで、陸学の「言語文字」に重きを置かない側面をより強調したのである。

また別に出版された「象山先生語録」の序文でも、「陸先生の学問は、言葉で伝えることのできるものではないし、学ぶ者も言葉でもってそれを求めることはできない」、「いまの先生を口で語り、心から慕っているという者はどこにでもいるが、果たして先生の学を真に知ることができている者は一人としていないだろうか、果たして先生の学を真に実行できている者が一人としていないだろうか²⁴」というように、陸象山の学問は「言語文字」によっては伝達不可能であるという側面が強調されていく。ここではもはや、先述した象山が朱子のお株を奪って詳細な「言語文字」の議論を展開したこと、また人々に自己の考えを広めようと意図したという側面が語られることはない。しかし、このように陸学の特徴を朱子学との対抗上絞り込んでいくことが、より陸学の存在意義を明確にしたということができよう。つまり、南宋から元代という印刷出版文化が進展する時代にあつて、メディアを積極的に活用した朱子学は朱子及びその注釈研究書を爆発的に増加させていったのであるが、一方の陸学は、学派の特徴を際立たせるために意図的に書物量の増加を抑えていったということができる。陸学派は著作、出版物を増やせなかったのでも、増やすことのメリットに気づかなかつたのでもなく、意図的に増やさなかったという側面を忘れてはならない。自派の主張を拡大普及させるために、言葉をできるだけ多く費やし、出版物を増やしていこうとする戦略が常識であつた時代にあつて、陸学の「言語文字」を減らそうとする作業も、いわば自派の生き残りをかけたひとつのメディア戦略だつたといえるのではないだろうか。

- ① 『宋元学案』卷七七「槐堂諸儒学案」。
- ② 楠本正継『宋明時代儒学思想の研究』（広池学園事業部、一九六二）、頁二六九—三八八。
- ③ 石田和夫「錢融堂について——陸学伝承の一形態——」（『中国哲学論集』二号、一九七〇）。
- ④ 『朱子語類』卷一九、第七条。
- ⑤ 陳栄捷『朱子門人』（華東師範大学出版社、二〇〇七）でも、包揚兄弟は三人とも朱子門人とする。頁四二—四三。
- ⑥ 前掲陳栄捷氏著、頁二〇四—二〇五。
- ⑦ 『朱子語類』卷二五、第六八条。
- ⑧ 張栻の卒年は一一八〇年、呂祖謙は一一八一年、陳亮は一一九四年である。張栻の死後、朱子は自己の意に適うように『張南軒集』を編

纂した(高畑常信『南宋湖南学の研究』第三章「張南軒の思想」)(秋山書店、一九九六)。盟友の呂祖謙もその死後朱子はその学問を批判している。そして、陸象山に対する朱子の批判も、その死後に最も激烈になるといえる。朱子が同時代の主要な思想家の中で最後まで生きたことが、学派拡大の要因のひとつとなったことは間違いない。これについては、田浩『朱熹の思維世界』第九章「朱熹与陸九淵」(允晨文化、一九九六)、頁二九八―二九九、を参照。

⑨ 『説書附志』には、無極太極論争に関する朱陸の往復書簡をまとめた『無極太極弁』一卷がある。

⑩ 陳栄捷「朱子之印務」(『朱子新探索』台湾学生書局、一九八八)、徐德明「朱熹刻書考略」(『朱子全書』与朱子学——二〇〇三年國際學術討論會論文集)華東師範大学出版社、二〇〇五、陳国代「文献家朱熹・朱熹著述活動及其著作版本考察」(北京師範大学出版社、二〇一五)など。

⑪ 小島毅「朱子学の展開と印刷文化」(伊原弘、小島毅編『知識人の諸相——中国宋代を基点として』勉誠出版、二〇〇二)、頁一九八、二〇〇。

⑫ 小路口聡『即今自立』の哲学・陸九淵心学再考第二章「陸九淵門人群像」(研文出版、二〇〇六)、頁八二。

⑬ 『陸九淵集』卷二「与朱元晦(第一書)」(中華書局、一九八〇)。

⑭ 東景南「朱熹年譜長編」卷下(華東師範大学出版社、二〇〇二)、頁八八一。

⑮ 東景南氏によれば、この時に『太極図説解』『西銘解』を出したのは、主に陸氏兄弟と林栗への対抗を想定してのことで、特に「或乃未

嘗通其文意、而妄肆詆訶」というのは林栗を指しているという。前掲東氏著、頁八八六

⑯ また次を参照。『陸九淵集』卷一五「与陶贊仲二」(荆公祠堂記与元晦三書併往、可精觀熟説、此數文皆明道之文、非止一時弁論之文也。

元晦書偶無本在此、要亦不必看、若看亦無理會處。吾文条析甚明。所举晦翁書辭皆写其全文、不增損一字。看晦翁書、但見糊塗、沒理會。觀吾書、坦然明白。吾所明之理、乃天下之正理、実理・常理・公理。

⑰ 祝尚書『宋人別集叙録』下(中華書局、一九九九、頁一〇八―一〇九四。他にも「年譜」によれば、開禧三年(一二〇七)に象山の門人で撫州知事であった高商老が郡学で文集を刊行し、倉司本が出版されたのと同じ嘉定五年には門人の張衍(字は季悦)が「遺文」を編集し、傅子雲の序文を附して刊行している。この二本と先の四本との関係は不明であり、これら六本すべて現在に伝わらない。明刊本は十余種が知られているが、多くは建安陳氏坊本の系統であるという。

⑱ 『黄氏日抄』卷四二「讀本朝諸儒書十」。

⑲ 『宋元学案』卷九三「静明宝峰学案」に「楊伝統録、象山四伝」として、伝がある。

⑳ 『侯菴集』卷二四「上饒陳先生墓誌銘」。

㉑ 『宋史』卷四二三、「宋元学案」卷七四「慈湖学案」などに伝がある。

㉒ 『呉文正集』卷二二「尊徳性道問学序記」。

㉓ 『呉文正公外集』卷二「雜識一四」。

㉔ 『呉文正公集』卷一七「象山先生語録序」、「陸九淵集」所収「呉澄叙」。

おわりに

朱陸の争いは、表面的に見れば朱子学の勝利であったことは間違いない。だが、このような情勢の中、朱子学はすでに失われたとの叫びがあったこともまた事実である。

いま天下の学士の家には朱氏の書があり、人々は朱門の言葉を暗誦している、……（しかし）朱文公の著作を無駄に暗誦し、朱文公の伝えた道を知らない。……（そのため棟は）朱文公の書が存在しているとはいえ、朱文公の道はいままさに喪われようとしていることを恐れるのです。（『豫章文集』巻一五附、楊棟「請諡羅李二先生状」）

近年来、朱氏の書が広く流通し、いま政府の要職にある多くの者がかつて先生の門に登り、その教えを受けたと自分で言っているが、彼らの振る舞いは教えに背き誤りが多く、歎息せしめるありさまである。（劉宰『漫塘集』巻六「回湯德遠」）

ここには、書物の流通量とその学問が正しく伝わっているかどうかはまた別問題であるという認識がある。^① 朱子学の普及は俗化をともしなうものであり、本来のあるべき学問の本質（「文公の道」）を喪失してしまったと、一部の良心的な学者は嘆く。いっぽう陸学は意図的に書物を減らすことで、陸学の本質を守ろうとしたが、それゆえ普及の面では朱子学に及ばず、勢力を失う。このように考えるなら、朱子学は出版印刷文化が進展する新たな時代に適合していったが、陸学は不適合であったというよりは、朱陸とも学問の正しいあり方を守ることと学派の普及との間でジレンマを抱えていたというべきではないだろうか。おそらくそれは、朱陸いずれであろうと、「言外の意」の境地を語るといふ学問的特質に加え、それぞれの学問を学び受入れていった大多数が、南宋時代以降、ますます増大する下層士人であったことがその原因のひとつ

つであつたと思われる。朱子学では門人や後学の要求に應えるように、師説に関する解説書の編纂が続けられ、その量を増やしていった。なぜこのようなジレンマを抱えなければならなかったのか。陸学については黄宗羲が次のようにいう。

陸子は五年間にわたり象山にあり、弟子となつた者は数千人にいたる、なんと盛んなことか。……しかし、この数千人の中には、もともと「旅進旅退の徒」が多い。いまここにその名を伝える数十人は、概して見るべきところがある。（『宋元学案』卷七七「槐堂諸儒学案」）

数千人の弟子のうち、大半は「旅進旅退の徒」（大勢に押され、自己の主張もなく他人の意見に流される者）であつた。学問の普及とはこの士人層の大多数を占める「旅進旅退の徒」に支持者を獲得していくことである。象山の死後、陸学からはこのような人々が離れていったのに対し、朱子学陣営では逆に彼らを取り込んでいく。

朱子の門人について網羅的に調査した陳栄捷氏によれば、科挙に合格するなどして官職を有していた者は少数派であり、大多数は、出仕せず地域に生きる士人層であつた。^②例えば、弟子の葉賀孫（別名味道）は幼少の頃に両親を失つたことから全く学問の機会がなく、成人してから周囲は科挙勉強にいそむ者ばかりだったが、朱子編『語孟精義』を読んでから聖賢の学を志すようになったという（『語類』卷一一四、第一五条）。また、許叔重という弟子は大変貧しい（『太貧』）ことを理由に科挙の勉強をしているという（『語類』卷一三、第一五八条）、またある者は学問仲間の一人が家が貧しいため、学問をしていない子弟に商売をさせている（『語類』卷一三、第四〇条）というなど、その程度の詳細については不明であるが、家の貧困を嘆く弟子の姿をみることも珍しくない。朱子は科挙を受験すること自体を全面的に否定するわけではないが、科挙勉強ばかりしている弟子を、次のように一喝している。「何度受験しても受からなければ、年を取ってただこんなに老いばれて、郷里で浮き沈みするだけになってしまう。もしかりに科挙用の文章で役人になれたとしても、まったく

いい加減なもので、国のため民のために利益を増やし、害を除いてやろうと、心を尽くして奉職することなどあるまい。いつも心の中では出世することはかり考えて、権力者におべっかをつかい、推挙されることだけを求めて、そのためならどんなことでもやりかねないのだろう」（『朱子語類』巻一三、第一四五条）。

近年の研究では、科挙に受からず地域に埋没していく士人層を地域秩序の安定に寄与する「ローカルエリート」として捉え、朱子学はこのような人々の間に受入れられていったと論じられる。^③しかし、ここに挙げた門人たちは果たして「ローカルエリート」と呼ぶに相応しい存在であったであろうか。その検討は別になされなければならないが、確かなのは朱子の周囲には仕官や俸禄の多寡ばかりに気を取られ、「道義を身につけた山林に住む無官の士」の方がまだと叱りつけられる多くの「身を修めることができない」者（『語類』巻一三、第一六四条）が集い、彼らも含めて朱子学派を形成していたということである。このような道学内の出世ばかり求める「浅陋の士」は「聖門の大罪人」と糾弾されることもあり、朱子ですら学団内の「真偽弁じがたき」門人の存在に悩まされていた。^④しかし、科挙社会という競争原理社会にある南宋の時代にあつて、恐らく彼らは社会的文化的上昇志向を強く持ったごくありふれた士人達であつたであろう。その評価のまだ安定しない朱子在世中ですらこのような状態であつたことからすれば、朱子の復権がなされ公認されていく中にあつて、「当路の売薬綿」と呼ばれる二七者の朱子学者が続々と現れるのも、当然のことであつた。

この様な時代に四書疏釈書を含め、多くの朱子学解説書が生まれた。このような書物を求め、受容していったのは、朱子学とは何かまだよく分からない多くの「初学者」たちであつた。後に呉澄が「記誦詞章の俗学」、「朱門末学の弊」と叫ぼうが、難解な道学概念を誰にでも分かるよう、多くの言葉を用いて懇切丁寧に説明した朱子学解説書は、多くの下層士人たちに受入れられていったのである。

① 楊棟「請諡羅李二先生狀」（『豫章文集』巻一五附）、「此言為道義而發、書之多寡初不足計、且聖賢著述皆非得已」。

② 前掲陳榮捷氏著。
③ 市来津由彦『朱熹門人集團形成の研究』（創文社、二〇〇二）所収

の各論、および同氏「地域講学から王朝の学びへ——「学」としての朱子学の形成をめぐる——」（伊原弘等編『中国宋代の地域像——比較史からみた専制国家と地域——』岩田書院、二〇一三）、ピーター・K・ボル、鈴木弘一郎（訳）「地域史と後期帝政国家について——金華の場合——」（『中国——社会と文化』第二〇号、二〇〇五）、また同氏、高津孝（訳）「地域史の勃興——南宋・元代の婺州におけ

る歴史、地理学と文化」（『東アジア海域交流史 現地調査研究』地域・環境・心性 第一号、二〇〇五）を参照。

④ 『斉東野語』巻一「道学」。

⑤ 『朱子文集統集』巻一「答黄直卿」。

⑥ 『四朝聞見録』丁集「慶元党」。

（兵庫県立神戸北高等学校教諭）

The Chief Causes of the Appearance of the *Collective Commentaries*
on the *Four Books* during the Southern Song:
The Transmission of Teachings and Publishing Culture

by

TANAKA Hideki

This article discusses factors concerning the question of why the *Collective Commentaries* on the *Four Books* 四書疏釈書 appeared during the Southern Song. These commentaries provided further explanations of Zhu Xi's commentaries on the *Four Books*, the *Sishu zhangju jizhu* 四書章句集注. *Collective Commentaries* were published one after another, influencing not only Chinese but all East Asian, Confucian cultures both academically and ideologically.

The first section focuses on understanding the characteristics of the *Collective Commentaries* in the context of annotation history in the Song dynasty. As is widely recognized, commentaries on the *Classics* during this period put more emphasis on understanding the overall message (*yili* 義理) rather than providing a word-by-word interpretation (*xungu* 訓詁), and these were also called *yili xue* 義理學. As they took the discursive forms such as treatises (*lunwen* 論文), letters (*shuxin* 書信), analects (*yulu* 語錄), lectures (*jiangyi* 講義), they were also called discussion (*yilun* 議論) studies. These are chiefly records in a colloquial form of dialogues between masters and disciples and the contents of lectures, and many were commentaries intended to refute the arguments of opponents. The contents depended on coincidental factors associated with venue of the dialogue or lecture such as the academic needs of the disciples or the identities of those in the audience. Their contents were often debates regarding the value of the *Mengzi* or political disputes over the thought of Wang Anshi 王安石. The interpretation of the *Classics* itself was still secondary as the purpose was to refute political enemies or opponents in debate. A common characteristic of these Song “discussion studies” was the deft utilization of many words to logically persuade readers so they would thoroughly understand the author's

arguments. In contrast, what Zhu Xi was particularly concerned in the *Sishu zhangju jizhu* with emphasis on word-by-word interpretation (*xungu*) in order that readers would comprehend the meanings of the *classics* for themselves. Therefore, Zhu Xi reduced the number of the words in his commentaries as much as possible and taught his disciples to peruse the *classics* carefully because he was afraid that his commentaries would become “annotations for annotations”.

The second section addresses the chief causes of the appearance of the *Collective Commentaries*. Because Zhu Xi made efforts to reduce the number of words in *Sishu zhangju jizhu*, he conversely became concerned that readers would misunderstand his thought. He wrote *Sishu huowen* 四書或問 in order to ease these concerns and carefully explained either orally or by means of his letters the gist to novices who did comprehend this work. These were then compiled as the *Zhuzi yulei* 朱子語類 and the *Zhuzi wenji* 朱子文集. In other words, the *Sishu zhangju jizhu* commentary was difficult to comprehend without reference to the many other works of Zhu Xi. The *Collective Commentaries* are works based on many citations from the *Zhuzi yulei* or *Zhuzi wenji* etc. and thus without exploring the many works of Zhu Xi, one could learn the important points of his thought. Therefore, considering the commentarial tradition in the Song dynasty, the *Collective Commentaries* were writings that reverted to “discussion studies.” They became annotations for annotations, which Zhu Xi had criticized. But why did such books become widespread despite Zhu Xi’s intentions? This comes down to the fact of the demand for them after the death of Zhu Xi and his disciples. But this was thought by some to be a contradiction between, on the one hand, the idea of Neo-Confucians who insisted on the limitations of words in attaining experiential learning that would transcend comprehension by language to realize the way of saintly masters and the idea that one must use many words (language) to spread the master’s thought.

In order to analyze this contradiction, the third section focuses on the scholarly tradition of Lu Xiangshan 陸象山, who was an opponent of Zhu Xi and who most severely confronted this contradiction. As is well known, Lu Xiangshan criticized word-by-word interpretation (*xungu*) of the *Classics* and verbose logical explanation, and he did not leave many writings behind. Yet, he logically refuted Zhu Xi’s interpretation of words in debate and was devoted to spreading this through the medium of letters. In addition, after Lu Xiangshan’s death, his disciples strove to preserve as many of his words as possible, compiling collections of his writings and his analects. However,

such a media strategy by the scholars in the tradition of Lu Xiangshan obviously went against his teachings, and in competing with the scholars in the tradition of Zhu Xi, they were unable to expand as a school or to write new books due to their self-discipline and effort to purify themselves as a school without “written language”. In short, the scholars of the Lu Xiangshan school abandoned the way of compiling writings that the scholars of Zhu xi school had done in producing the *Collective Commentaries*. As a result, their influence never equaled that of the followers of Zhu Xi.

Given the above argument, it was novices who could not comprehend Zhu Xi's *Sishu zhangju jizhu* who first called for the *Collective Commentaries*. The Southern Song is said to be an era when the bottom rung of the intellectual class expanded. During such a period, a considerable number of novices whether they were scholars of the tradition of Zhu Xi or that of Lu Xiangshan, could not comprehend the teachings well unless clear explanations were provided. Accordingly, the scholars of Zhu Xi's school responded to such demands with the *Collective Commentaries* and thereby increased the number of students in their school. In contrast, it was likely the case that the scholars of Lu Xiangshan's school failed to take in new disciples due to their loyalty to the teachings of their teacher.